142 骨シンチグラムにおける単発性骨転移の原発巣別部位別頻度

小野 慈、（神奈川がんセ・核）川本雅美（同・放）井村悦子（横浜市大浦舟・放）

骨転移と診断された症例の治療方針の選択枝は少なくなるが骨転移が一か所に限局している症例では局所療法の適応となる余地が残されている。 1986年から1993年までの 8年間に検査した骨シンチ 13124件のうち単発性骨転移 240例について原発巣別部位別頻度を調べた。

症例数として多いのは肺癌83例(35%)乳癌54(23%)で腎癌14(5.8%)子宮頸癌12(4.9%)がこれに次ぐ。単発性骨転移が原発巣ごとの骨転移に占める割合は 軟組織肉腫 42%腎臓 39%子宮体部 38%甲状腺 30%の順に多く少ない割合の原発巣は胃 8%前立腺 11%であった。単発性骨転移の発生する部位は骨盤 30%肋骨 15%腰椎 13%胸椎 11%の順で多く胸骨9%大腿骨8%頭蓋骨7%がこれにつづいた。

143 前立腺癌患者における骨シンチグラム上の骨転移半定量法（Soloway の半定量法）と腫瘍マーカーの関係

相澤 卓，栃本真人，伊藤貴章，並木一典，三木 誠（東京医大泌）

骨転移量が腫瘍マーカー値やアルカリホスファターゼ(ALP) 値によりある程度推測できないか検討した．

対象は治療前に腫瘍マーカー(PAP、γ-SM、PSA)、ALP ならびに骨シンチグラフィが測定できた前立腺癌 193 例である．骨転移量はSoloway の半定量法に準じて解析し、腫瘍マーカー、ALP 値と対比した．

骨転移量は腫瘍マーカー値、ALP 値と必ずしも一致しなかったが、その中でもALP 値、 PSA値が比較的骨転移量を反映していた．一致しない理由としてALP 産生の差異、軟部組織転移巣の存在や組織型による腫瘍マーカーの産生能の差異などが推察された．

144 骨シンチグラフィ上良性骨疾患との鑑別が困難であった乳癌骨転移例の検討

玉田 勉、大塚信昭、曽根照喜、森田浩一、福永仁夫（川崎医大 放）

9年間の乳癌症例 1,080 例中、骨シンチ上骨転移の早期診断が困難であった 10 症例を retrospective に検討した。内訳は、肋骨の微小骨折とした肋骨転移 4 例、および肩関節炎とした関節近傍への骨転移例、胸骨の正常変異とした胸骨浸潤例、骨盤部の微細な hot spot が転移と判明した症例各 2 例である。骨シンチ上最初に所見が認められてから増悪までの期間は、2～6 ヶ月（平均 4.5 ヶ月）であった。さらに、良性例も含めた肋骨や関節部の軽微な hot spot 全例の検討で、陽性例では、無所見例と比較し早期の経過観察骨シンチで骨転移と判定される例が有意に多く認められた。軽微な変化でも、骨シンチの所見に注意して経過観察期間を決定することは骨転移の早期発見に重要と考えられた。

145 肝細胞癌骨転移診断における ^{99m}Tc-HMDP 骨シンチグラフィ及び ^{99m}Tc- HMPAO 標識白血球骨髄シンチグラフィの有用性

埼玉医大第3内科 木下 学、今井幸紀、藤原研司
同放射線科 大日方研、 鈴木健之、宮前達也

当科にて過去 5 年間に ^{99m}Tc-HMDP 骨シンチグラフィを施行した肝細胞癌(HCC)症例について、HCC 骨転移診断における同シンチグラフィの成績及び骨転移陽性例の原発巣の特徴について検討し、同シンチグラフィの臨床的位置づけについて明らかにした。骨シンチグラフィは敏感度が極めて高く、また偽陰性率が極めて低いため、骨転移が疑われる HCC 症例に対しての first step の検査法として非常に有用と思われた。骨転移陽性率と原発巣進展度との間に関連はなかった。さらに ^{99m}Tc-HMPAO 標識白血球による骨髄シンチグラフィを施行し、その有用性も検討した。

146 椎間板炎における骨シンチグラフィ所見の検討

住 幸治，長谷川弘，中西 淳，尾崎 裕，京極伸介，新藤昇，片山 仁(順天堂浦安放)玉本文彦(都立大塚診放)

椎間板炎17例における骨シンチグラフィの描出率とその集積パターンについて検討した。描出率は17例中16例(94.1%)であった。集積パターンは、椎体1個に限局するもの(1型)、罹患椎間板に欠損像を認めその上下椎体辺縁部に集積を認めるいわゆるsandwich型のもの(2型)、椎間板を含め上下2椎体に連続して集積を認めるもの(3型)に分けられた。我々の症例では、3型のものが約88%と多く、従来典型的とされたsandwich型のものは約12%と少なかった。その原因として、対象患者に高齢者が多かったことと、症状発現から骨シンチ施行までの期間が長かったことが考えられた。また、経過の追えた症例より、2型から3型に変化することが推定された。

147 骨シンチグラフィによるアミロイド病変の描出

日野 惠、伊藤秀臣、山口晴司、大塚博幸、檀 芳之、才木康彦、太田圭子、尾藤早苗、増井裕利子、池窪勝治（神戸市立中央市民核）

骨シンチグラフィにて検出された心アミロイドーシスの3例と肺アミロイドーシスの1例を経験した。撮像はTc-99m HMDP 740 MBq投与3時間後に行った。3例の心アミロイドーシスではPlanar像にて軽度の心筋の描出が認められた。その内の1例では続けて施行したSPECTにより心筋内での不均一なアミロイド病変が検出され、後に心筋生検にて診断が確定した。肺アミロイドーシスの症例ではPlanar像では明らかな異常集積はみられなかったが、SPECTにて肺野に明瞭な集積が観察され、組織学的にもアミロイドが証明された。骨シンチグラフィはアミロイド病変の検出に有用であり、SPECTを施行することによりさらに検出率は向上すると考えられた。

Presented by Medical*Online